

脆弱な土台が持つ希望の危うさ

今朝、私達は希望について考えていきたいと思えます。特に私達が希望を持つ理由、そして、私達の希望とは確証という大前提の上に成り立っている点についてです。一般的に、希望とは、何か良いことが起こると期待をすることでしょう。そして、希望には、起こるかもしれない、起こるだろう、確実に起こるといった段階的な期待感があります。つまり、希望実現の確率性は、その背後にある確証の強度によって増すこととなります。そのような確証は、大体にして、過去の傾向や、法律の判例、科学的根拠や助言者への信頼度を基盤としています。

例えば、私が次の休みに気温24度の快晴を望んだとします。5月のメルボルンで、このような天気を期待するのは、現実的なことでしょうか？過去、現在のメルボルンの天気からして、誰もこれが現実的とは思わないでしょう。その反論にも関わらず、私がそのことを強く信じたとしても、それは、何の根拠や確証もない、非論理的で、ただの楽観的な期待だと嘲笑されることでしょう。

私達はこのように何か素晴らしいことが起こるのではなかと楽観的な期待を抱きがちですが、多くの場合は、その期待は裏切られ、失望したり、自己否定をしたり、「希望を失った」と呟いたりします。

このウィルス拡散の時期に、もし神様が何かを私達に見せようとしているなら、それは、希望を支えている土台はかくも脆弱であり、神様がもたらす希望も容易に消えてしまうものということでしょうか。

The passage before us asks the questions… ‘In what or whom are we placing our hope?’ ….’ Is it a foundation that is subject to change?’

本日の聖書箇所には、このことへの問いかけが記されています。「私達の希望は何であるのか、誰に対してなのか。」そして、「その希望の土台は本当に脆弱なものなのか。」もし、そうであるなら、私達は大きな問題を向かえます。

我々に対する教訓として、神様は時に、辛く苦しい経験を用意します。そこでは、あたかも希望は、はかなく、何の確証もないものであるかのように写ります。しかし、本日の聖書箇所では、神様の元での希望は、確証された希望であり、決して変化することがなく、神の恵みにおいて、私達が待ち続けることができる唯一のものであることが語られています。著者は、このことを、神様がアブラハムにした約束の中で説明しています。そして、大祭司、イエスの神様の信頼と献身的な御業において、その約束はいつそう完全な形を成しています。

始めに、ヘブル人への手紙の著者が記している神様からアブラハムへの約束の箇所を見ていきましょう。

アブラハムの場合（13節～15節）

¹³ 神は、アブラハムと約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、¹⁴ 『わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす』と言われました。

著者は、イエス様から受けた赦しと信仰を失うことは、背信的な行為であると忠告しています。ヘブル人や私達に、無気力になるのではなく、むしろ忍耐を持って神様との約束を引き継ぐ者達となるように、この著者はアブラハムを例として挙げています。著者は私達をイエス様が生まれる 2000 年も前の世界へと連れて行きます。そこは、イスラエルが生まれてから、たった 2 世代しか離れていませんでした。

創世記 12 章で、神様は、アブラム（「高く上げられた父」という意味）と約束を交わしています。その約束から 24 年後、彼が 99 歳となった年に、名前をアブラムからアブラハム（多くの者の父）に変更し、そして 100 歳の時に、息子イサクの出産をとおして、約束の証を示しました。

それは、恐らくイサクが 10 代の頃でしょう、神様はアブラハムを試されました。イサクを神への生贄とするように命令をしたのです。アブラハムは神様が、途中で思い留まり、代わりに羊の生贄を求められると信頼していました。実際に、神様はそのようにされました。そして、アブラハムの信仰は証明されたのです。

これは、神様の彼への誓いに繋がっています。誓いとは、もっとも強い約束です。よく、法廷での証言の前に「神に誓って真実を証言します」と宣誓するのは、この話が由来となっています。

この誓いの中で、神様はアブラハムを祝福し、彼の子孫が砂浜の砂のごとく増え繁栄することを約束されました。この約束の始まりを、アブラハムは 25 年もの間、待ちました。そして、神様がその約束を誓うまでに、さらに 15 年間の月日が流れています。興味深いことに、イサクが十代になり、神様がアブラハムを試すためにイサクを選ばれるまでの期間、アブラハムは、神様の約束のほんの一部しか受け取っていませんでした。しかし、15 節で、この著者はこう述べています。

「アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。」

どのようにして、アブラハムは忍耐の末に約束を得たのでしょうか？

著者は、創世記 12 章で記されている神様の約束からイサクが生まれるまでの 25 年という長い間、アブラハムは罪人ではあったが、ずっと、忍耐をもって待ち続けたことに着目しています。

それから、イサクの誕生から 15 年後の試練、自らの子イサクを神様への生贄として捧げることで示した、アブラハムの偉大な信仰、神様への服従も忘れてはいけません。それは、年老いた一人の男であるアブラハムが、息子イサクのためのみではなく、後の子孫、そして未来を生きる私達が、神様の誓いの恩恵を得ることができるためのものです。著者は、神様の誓いは、確証された誓いであると言っています。このことは、私達に何を語っているのでしょうか？

疑心的な人々が「私は、それを見るまでは信じない」と言っているのを、耳にしたことがあると思います。私達が神様の救いと、とこしえの栄光を実際に見る時は、人生を終えた時か、イエス様がこの世に戻ってこられた時かの二つのみです。安易に、実際にこの目で見た時に信じると結論付けてしまっているのでしょうか？ 神様は、約束のみでなく、誓いをたてられました。それは、神様が人間にお与えになる物の最終的な形です。

誓いの終着点 (16 節～18 節)

16 節では、**「人間は自分よりすぐれた者をさして誓います。確証のための誓いというものは、人間のすべての反論をやめさせます。」**と記してあります。

ここでまず、誓いというのは、自分より偉大な相手に対してするものであると述べています。なぜなら、誓いの確証を得るためです。私達はこれが、誓いの姿であることをよく知っています。なぜなら、法廷では、「神に誓って、または神は私の承認です」といった宣誓を述べたり、「神とこの会衆の前で」と言って、宣誓書にサインをしたりします。もし、その誓いをやぶるなら、私達は法廷で裁かれるでしょう。これは、不動産購入者が期限内に返済をできない場合に備えての、頭金に似ているかもしれませんが。しかし、もしその購入者に、より裕福な保証人を契約に含めるなら、ローン会社は、自信をもって、その契約（誓い）を結ぶことでしょう。

17節では、「そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらに示そうと思い、誓いをもって保証されたのです。それは、変えることのできない二つの事がらによって、神はこれらの事がらのゆえに、偽ることができません。前に置かれている望みを捕らえるために逃れてきた私達が、力強い励ましを受けるためです。」と記されています。

ここにはとても重要なことが記されています。それは、創世記 12 章で神様がアブラハムに約束をしてから、40 年後に、神様が、約束の相続者に対しても、誓いをもって、その約束を保証したのです。

ガラリア人への手紙 3 章 29 節で、使徒パウロは、もし私達がキリストのものであるならば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人であることを語っています。これは、イエス・キリストを救い主として崇める私達は、約束の相続人であり、保証の受取人であるということです。これは、約束と誓いによって成る神様の大いなる計画です。

そして、変えられない二つの事がらとは、

1. 神様の約束
2. 神様の誓い

両者は、偽ることができない神様によって、保証されています。

神様の約束と誓いの真の意味とは、アブラハムの子孫である私達に、神の目的の不変性、そして、その計画が私達にとってのものであることを、神様がさらに一步踏み込んで、自身のためではなく、この世界のために、誓いを結ぶことで、私達に示すことにあります。

人間の視点から、このことを考えた場合、もし、誰か非常に位の高い権威者が、何らかの宣言をした場合、彼や彼女の主張は、正当性があり、多分に信じるに値するものであると、ある程度の確証を持つことができるでしょう。しかし、もし、全てを統べる者が、人々のために誓いを立てた場合、それは、まさしく

「Condescension」という言葉がふさわしいものでしょう。それは「ある位や権威ある者が、自らよりも下位に位置する者に対して行う、寛大で自発的な行い」という意味です。

神様は、アブラハムと（イエスを信じ、信仰的にアブラハムの子孫である）私達に、すすんで同じことをしてくださいました。イエスがこの世に降り立つ 2000 年も前に、神様は、自身をへりくだり、アブラハムの元へと来られました。それは、不安や恐れを抱き、逃れてきた私達のためです。

しかし、どうして、イエスの信仰者を「逃れてきた者達」と呼ぶのでしょうか？

その答えは、著者がイエスを、自らを犠牲として、私達の罪の禊を行い、私達を神様の元へと救ってくれた、偉大な大司祭と呼んでいる所にあります。そして、それは、イエス・キリストの行いだけではなく、神

様が約束と誓いによって、その保証の土台を強固にしてくれたからです。アブラハムの子孫が海辺の砂のごとく増え、祝福を受けることは確証されているのです。

アブラハムのように、私達は神様の約束と誓いを受けています。しかし、アブラハムとは違い、私達は過去を振り返ることができます。そして、アブラハムの孫のヤコブ（別名イスラエル）からの旧約聖書時代を生きた人々の繁栄を見て、神様の約束が守られている様子を知ることができます。そして、彼の全ての子孫たちは、救いの王であり、大司祭であるイエスを信じ、聖油をその身に注いだのです。イスラエルの直接の子孫たちはイエスを信じ、初めのユダヤ人クリスチャンとなりました。そして、今日でも彼らの子孫たちはイエスを信仰しています。さらに、様々な国々の兄弟姉妹たちが、同じようにイエスへの信仰を持っています。この者達は異邦人クリスチャンと呼ばれる人々です。イエスを信じる全ての者は、神様がアブラハムと結んだ約束の中にあり、そして、イエスの血によって、それを、その身に印として刻んでいます。

あなた方と私は、イエスの中に希望を持っているのです。

確証された希望から受ける、力強い励まし (19 節～20 節)

19 節では、「この望みは、私達のたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側に入ります。」と記されています。

神様の約束と誓いは、安全で確かな錨です。ここで著者は、その約束と誓いを、希望を成就する大司祭であるイエスと結びつけています。マタイ、マルコ、ルカの福音書での、イエスの死を描いた箇所を思い出してみてください。そこでは、人々と神様のご臨在のある至聖所を隔てる、大きな幕が上から下まで真っ二つに裂けたと記されています。これは、私達が赦しを得て、神様と私達を隔てたものが、取り除かれたことを意味しています。

20 節では、「イエスは私達の先駆けとしてそこに入り、永遠にメルキゼデグの位に等しい大司祭となりました。」と記されています。

著者は、イエスの死の瞬間に神殿の幕が裂けたことで、イエスは「先駆者」となれたと言っています。それは、勇敢な軍の指揮者が、軍の先頭に立って、道を切り開いたようだと意味しています。

イエスはすでにこの世を去られました。そして、父なる神の元へと帰られました。彼の死によって、カーテンは裂かれ、永久の祭司として、私達が道に迷わないように、その道に道標を置かれました。（メルキゼデグについての、詳しい説明は来週させていただきます。）

確かな約束と誓いの印

4000 年もの間、神様がアブラハムに誓った約束は、イスラエルの人々から、イエス・キリストへ、そしてキリストから今日の私達と数え切れないイスラエルとその他の国々の人々へと受け継がれています。しかし、私達は、これを保証という言葉の表面的な意味のみで片付けるべきではありません。そこには、神様のアブラハムに対する謙虚さと、誓いに含まれた大いなる恵みがあることを忘れてはいけません。そして、イエス・キリストにおいて、私達のたましいのために、この神の誓いの全ては、彼の血で印を刻みました。

この希望の保証は、この瞬間でさえ、神様から私達へと与えられています。

J. I. パッカー師は次のような言葉を残しています。「楽観とは、保証のない願望です。クリスチャンの希望は、神様によって確証されています。楽観は、良い事柄がいつか必ず起こるかどうかに対して盲目です。クリスチャンの希望は、日々、そして瞬間、瞬間においてでさえ、信じる者達が、神の名の下に、その日はいつか必ずくると、確信を持って言うことができるものです。」